

2025年度
入学試験問題

国 語

2月11日

受験番号	氏 名

中村高等学校

問題は次のページからです。

一

次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書きなさい。

- (1) 悠然とたたずむ。
- (2) 余暇を楽しむ。
- (3) 世の中の動きに鋭敏な学者。
- (4) 諭すように話す。
- (5) 遠い故郷に焦がれる。

二

次の各文の――を付けたカタカナの部分に当たる

漢字を楷書で書きなさい。

- (1) 冷暖房をカンビしている。
- (2) 新しい作品をヒロウする。
- (3) 資源がジュンタクにある。
- (4) 来場者数がノベ五万人に達した。
- (5) 信頼関係をキズく。

三

次の1～5の俳諧には、それぞれ一つずつ歴史的仮名遣いで書かれた語がある。それぞれ抜き出し、現代仮名遣いに直して平仮名で書きなさい。

1. しをるるは何かあんずの花の色
(松永貞徳)
2. 海暮れて鴨のこゑほのかに白し
(松尾芭蕉)
3. 市中は物のにほひや夏の月
(野沢凡兆)
4. 朝顔につるべとられてもらひ水
(与謝蕪村)
5. 象潟きさかたもけふは恨まらず花の春
(小林一茶)

④ 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

(設問の都合上、本文を改変、省略したところがあります。)

* 字数指定のある問題については、句読点・記号も字数に数えます。

「わかる」という経験は、^A脳の中、あるいは肉体の内よりもはるかに広い場所で生起する。にもかかわらず、自然科学が理性をことさらに強調して、心的過程のすべてを脳内の物質現象に還元しようとする[※]ことで「人の心は狭い所に閉じこめられてしまっている」。岡潔は、このように嘆いた。

この身体、この感情、この意欲といえは本来はすむところを人はなぜか、自分のこの身体、自分のこの感情、自分のこの意欲と言わずにはいられない。ところが数学を通して何かを本当にわかろうとするときには、「自分の」という意識が障害になる。むしろ「自分の」という限定を消すことこそが、本当に何かを「わかる」ための条件ですらある。

「わかる」という経験の本来の深さを^{ちよくせつ}直截に示す例として、岡はしばしば「^{ひと}他の悲しみがわかる」ことについて

書いている。

他の悲しみがわかるということは、他の悲しみの情に自分も染まることである。悲しくない自分が悲しい誰かの気持ち^をを推し量り、「理解」するのではない。本当に他の悲しみがわかるということは、X。
「他の」悲しみ、「自分の」悲しみという限定を超えて、端的な「この悲しみ」になりきることだ。「理で解る」のではなく、Yがそれと同化してしまうことである。

私たちは本来、生まれつき他者と共感する強い能力を持っている。一九九六年にイタリアのジャコモ・リゾラッティらがサルの実験で「ミラーニューロン」を発見して話題を呼んだ。サルが(1)何かものを持ち上げる動作をすると、それに伴って脳の一部分が活動をする。ところが驚くべきことに、その同じ脳の部位の一部分が、他のサルが何かを持ち上げる動作を見ているだけでも活動するのだ。自分が運動をしているときだけでなく、他者の運動を見ているときにも、その運動を(2)自分がしているかのように脳が活動するのである。このよ

うに、他者の運動を模倣 (imitation) する機構が脳の中にあることを、彼らは明らかにした。

35

ミラーニューロンに関連して、ラマチャンドランという脳科学者が大変興味深い実験を遂行した。ミラーニューロンは実は、他者の運動だけでなく、他者の「痛み」をも模倣する。たとえば、目の前の人の手が金槌かなづちで思い切り叩かれるところを見たら、こちらまで思わず手を引つ込めてしまうだろう。目の前の人の「痛い！」という感覚を、見ているこちら側のミラーニューロンがコピーしてしまうからだ。それで思わずこちらも手を引つ込める。が、(3)、本当に痛いわけではない。

40

ラマチャンドランはここに着目した。ミラーニューロンは、他者の運動や感覚を模倣する。他人が痛がついてるときに、自分が痛いときに活動する脳の部位の一部分が発火している。② ② ならばなぜ、こちらは本当に痛くならないのだろうか。

45

ラマチャンドランは、手の皮膚や関節にある受容体から「私は触られていない」という無効信号が出て、ミラ

50

ーニューロンからの信号が意識にのぼるのを阻止しているのではないか、と推測し、アイディアを検証するためにハンフリーという、湾岸戦争で片腕を失った幻肢患者げんしに協力を依頼した。

55

幻肢患者は一般に、腕がないにもかかわらず、まだそこに腕があるという幻想を抱いている。ハンフリーの場合は戦争で腕を失っていたのに、顔を触れられるたびに、失った手の感覚を感じていた。

60

ラマチャンドランはそんなハンフリーに、ジュリーという別の学生を見てもらいながら、ジュリーの手をなでたり叩いたりしてみせた。すると、ハンフリーは驚いた様子で、ジュリーの手がされていることを自分の幻肢に感じる、と叫んだ。

65

ラマチャンドランの予想通りの結果だった。ハンフリーのミラーニューロンは正常に活性化されたが、

Z

がないので、ハンフリーのミラー

ニューロンの活動が、そのまま意識体験として現れてしまったのである。

ラマチャンドラン自身が「獲得性過共感」と名付けた

この現象は、幻肢患者でなくても、健常者の腕に麻酔を打つだけでも再現できることがわかった。麻酔によつて、皮膚からの感覚入力を遮断すると、誰もが文字通り、目の前の人と痛みを共有してしまうようになる。

「あなたの意識と別のだれかの意識をへだてている唯一のものは、あなたの皮膚かもしれないのだ！」とラマチャンドランは印象的な言葉でこの実験の報告を締めくくっている。

③ この実験は、私たちの心がいかに他者と通い合い、共感しやすいものであるかをまざまざと示している。脳の中に閉じ込められた心があつて、それが環境に漏れ出すのではなく、むしろ身体、環境を横断する大きな心がまづあつて、それが後から仮想的に「小さな私」へと限定されていくと考えるべきなのではないだろうか。

（森田真生『数学する身体』新潮社）

※岡潔……一九〇一年～一九七八年

日本の数学者。理学博士。

奈良女子大学名誉教授。

問一

線A「生起」と同じ構成の熟語を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、潜水 イ、貸借 ウ、知識 エ、地震

問二 ——— 線①はどのようなことを言っていますか。

適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、「わかる」という経験はごく個人的なものであるから、「人の心の理解」を大きく掲げてみたところで自然科学が追いつくものではない。

イ、「わかる」という経験を通して人は成長を遂げていくものであるのに、自然科学が追い求める「ものの理解」や「人の心の理解」はそのことを置き去りにしてしまっている。

ウ、自然科学は人の理性を追究するものであるということがこれまでずっと強調されてきたために、人の感性を追究することについては全く顧みられずに来た。

エ、自然科学により人の心をすべて脳内の現象として捉えようとするのがかえって物事の理解を狭め、その範囲を限定することにつながってしまっている。

問三 X に入れるのに適切なものを次から一つ

選び、記号で答えなさい。

ア、自分もすっかり悲しくなることである。
イ、その悲しみを想像してみることである。
ウ、自分から不幸に飛び込むことである。
エ、悲しみを乗り越えることである。

問四 Y に入れるのに適切な言葉を漢字一字で本文

中より抜き出して答えなさい。

問五 (1) (3) に入る言葉をそれぞれ次か

ら選び、記号で答えなさい。

ア、さも イ、もちろん
ウ、たとえば エ、いかに

問六 ——— 線②「発火」は比喻表現であるが、これを

適切に言い換えているものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、支配 イ、反応 ウ、再生 エ、合成

問七 Z に入れるのに適切な言葉を次から一つ

選び、記号で答えなさい。

ア、痛みを再現するための感覚入力
イ、正確に痛みを伝達する脳内物質
ウ、それを複製する新たなニューロン
エ、それを打ち消す手からの無効信号

問八 ——— 線③について説明した次の文の空欄に入る

言葉を、本文中からそれぞれ指定の字数で抜き出して答えなさい。

他者と通い合い、共感し合う私たちの心というものは、脳や体よりも I (八字) にあり、環境を横断するような大きなものである。「自分の」この身体、「自分の」この感情、と私たちが考えるのは限定された「 II (四字) 」であり、それは大きな心の一部と言ってよいのではないだろうか。

問九 本文の内容について、合っているものにはA、間違

っているものにはBをそれぞれ解答欄に書き入れな
さい。

ア、「わかる」ということについて、筆者の意見は岡
潔の考えと異なっている。

イ、「わかる」ということについて、「自分」をそこに
介在させるのはむしろ妨げとなる。

ウ、ラマチャンドランの実験は、幻肢患者の持つ痛み
について考察するものであった。

エ、ミラーニューロンが正常であるかどうかは、実際
に触感を得るかどうかには関係がない。

オ、ラマチャンドランは実験をもとに「獲得性過共感」
について興味深い論考を残した。

問十 本文で岡潔が『他の悲しみがわかる』ことについ

て書いている」とありましたが、あなたが誰かの気
持ちを知ろうとしたり分かってきたりする時、大
切にしたいのはどのようなことですか。二百字以内
で書きなさい。なお、書き出しや改行の際の空欄、
、や。や「などもそれぞれ字数に数えなさい。

五

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

（設問の都合上、本文を改変、省略したところがあります。）

* 字数指定のある問題については、句読点・記号も字数に数えます。

叔父に憧れて医師を目指していた川嶋有人は、中学二年生の時、アナフィラキシー（アレルギーの原因物質に触れたり食べたりすることによって、極めて短い時間のうちに引き起こされる全身のアレルギー症状）を起こした同級生道下麗奈を助けようとして処置を間違え、道下は言語に障害が残ることになってしまった。引きこもりになってしまった有人は、叔父が医師として勤める北海道の離島、照羽尻島^{てうじり}にある高校に通うことになった。全校生徒は有人を含めて五人。漁師を目指す誠、かわいくて優しい涼先輩、ある事情で札幌を離れた桃花、鳥類学者を目指すハル先輩。生徒や島の人たちと接する中で、有人の心は少しずつ自信を取り戻し始める。しかし、憧れていた叔父が病気で亡くなってしまい、有人は大きなショックを受けていた。そんなある日、涼先輩の両親が営む旅館の客に急病人が出た。道下麗奈と同じアナフィラキシーとのことだった。

もし、あの日と同じなら。あの人が道下と同じなら。でもわからない。間違えるかもしれない。黙っていても誰も責めない。

なにも、しなくてもいい。

① なにも動かなければ。

—— 有人。

—— 未来の自分を想像してみないか。

そのとき有人は、叔父の声を聞いた。

—— 進んだ先にあるもんなんだよ。

—— 動け。行動しろ。

誠の父と和人の声も。そして。

—— 俺は出る。

誠。

突如、凄まじい向かい風が吹きつけてきた。息もできないくらいの風だ。それを真正面から受ける。

前に進むときに感じるのは、1 向かい風だ。

元旦の海に消えたマフラーがまなうらをよぎる。

有人は足を踏み出していた。

観光客の男性は、小西さんといった。ヘリで搬送される際、同乗の医師に名を問われ、自分で答えた。

20

※「エピペンを打ったのは君？」小西のバイタルを確認した医師は、小さく頷いた有人に大きく頷き返した。「ありがとう、頑張ったね」

やりとりはあつという間だった。ヘリはすぐに小西を乗せて、北海道本島に飛び去った。

25

ドクターヘリのライトが星に紛れてしまうと、有人はどすんと雪の上に尻もちをついた。

「なした、有人」

大人たちが訊いてくるが、なにも答えられない。キャパシティを超えた緊張から 2 解放され、力がすつかり抜けた有人は、立ち上がることもできなかった。

30

怖かった。今になって震えが有人を襲う。

「でも、よくやったなあ、有人」

「あの、カチツてやるやつ^Bの使い方、よく知ってたな」

大人たちが口々にねぎらう中、涼先輩が涙ぐんで有人

35

の前に膝をついた。

「有人くんが帰ってきてて、本当に良かった……」

「涼ちゃんも大変だったな。さ、帰るべ帰るべ」誠の父が有人の頭にぽんと手を乗せた。

「今夜のヒーローも帰るぞ」

「……僕は」

「そんな格好で雪の上に座ってたら風邪ひくべ。ガタガタやつてるしよ」

40

集まっていた人々は、三々五々帰りはじめている。こんな大騒動があつても、数時間後には船に乗って海に出る人たちなのだ。涼先輩も両親に連れられて去っていく。何度も名残惜しそうに有人たちを振り返りながら。

45

「親父。先帰ってろよ。俺、ちよつとここで一休みしてから、有人を寮に送ってく」

「そうか」誠の父は深追いしなかった。「なら、そうせ」

50

自分が着ていた防寒服を有人に投げてよこして、誠の父は車で去っていった。

さつきまでの喧騒^{けんそう}が嘘みたいに静かなグラウンドだった。

誠が兄のように防寒服を有人にはおらせた。有人は少

し魚臭い温かみに包まれながら、空を見上げた。月は
I 薄く、そのぶん満天に広がる星の光は強い。

55

「小西さん、写真ちよつとは撮れたかな」誠が隣に腰を下ろした。「こんな空、俺らには普通だけだな」

「……ここ、すごくきれいに……ほ、星が見えるよ」歯の根が合わず、声にも力が入らない。「夏の……花火のときも……そう思った」

60

「ふーん」誠は天を仰いだ。「全然関係ないけど、さっきのおまえ、おまえみたいじゃないみたいだった」

誠の爪先が、器用に雪を有人へと蹴り上げてくる。目をやると、誠はにかつと笑った。

65

「すげーな、有人」

「……す、すごくないよ。全然」言葉が II 漂う。「全然すごくないんだ……だって、あれを知っていたのには……わけがある」

II 漂う。「全

……す、すごくないよ。全然」言葉が II 漂う。「全

あまりに気が抜けて、心のガードも緩んでしまっている。

70

有人は両手で顔を覆った。

「僕は……医者になりたかったんだ」

星の下で、雪の上で、有人は叔父への憧れを抱いた幼い日のこと、それから、悔やみ続けたあの日の一部始終を話した。

75

3 聞き終わるまで、誠は口も挟まず、寒そうなそぶりも見せなかった。話し終えると、有人の震えも治まっていた。

「そっか」誠は立ち上がった。「その道下さん、元気になつてよかったな」

80

「……うん」

「今夜のこと、教えてやれよ」

「え、なんで？」

「いや、なんとなく。その子なら喜ぶんじやないかと思つた」

85

スターバックスで振り返りもしなかった背中が、 III

雪のグラウンドに浮かぶ。有人は雪玉を作つてそれに投げようとして、やめた。

「もしもあの日がなかったらって、ずっと思ってた」手の中

90

って」

「でも、もしもあの日がなかったら、小西さんはヤバかったな」誠は尻についた雪を素手で払い落とした。「今はどうなのよ」

「今？」

「今はあの日のこと、どう思ってたんだよ？ やっぱ、なかったほうがいいか？」

有人はもう一度雪玉を作って、今度は誠に投げつけた。誠がやり返してくる。

「なあ、なんで今夜は行ったんだよ！ あるとき！ 涼ちゃんと小西さんのところに！ エピペンのありかと打ち方知ってるって！」

打ち方なんて、一度見ただけだった。しかし、脳裏に焼きついてた。もちろん、電話での確かな指示を出し続けてくれた医師のサポートは大きいが、ともかく有人は名乗り出てやり遂げた。

「涼ちゃんのことを好きだからかよ！」

「ま、誠って馬鹿だろ！」

誠は笑いながらグラウンドを駆けだした。

「……誠だってわかってるくせに」
叔父の言葉を知っている誠なら。

あるとき有人は、一瞬で未来の自分を考えた。十年後、二十年後の自分を想像して、今を振り返った。黙って突っ立っている己を後悔しないか考えた。

次に思い出した誠の父、兄、それからなにより誠の声。
②
号砲みたいだった。

「あの子、有人！ 救急車のかわりにドクターヘリがあるとか言うけどさ、俺や親父含めて島に住んでる人は、どっか覚悟してるところあんだよ」誠は飛び去ったヘリが雪面に残した跡の上に立った。「なんかあったら、しゃーない。駄目なときは駄目だって。都会じゃもしかしたら助かるかもしれない、ここじゃどうしようもないときがある」

「……うん」

「それでもさー。俺らだって人間だから、せめて医者がいたら、あわよくばすげー医者だったら、もしかしたら

「……うん」

「俺ら、川嶋先生ならいいやって思えてたんだ。なんかあつて結局駄目でも、診てくれたのが川嶋先生なら諦めつく。最善を見つけてくれる、絶対それをやってくれるって信じられた」

土日もたゆまず資料に目を通していた叔父の姿が思い起こされる。「うん……わかる」

「おまえの『あの日』ってのは、変えられねーよな。過去は変えられねーんだ。何度も言ってるだろ。天気と過去はどうしようもねーって」

「うん」

「でも、過去をどう思ってたのは変えられるよな、今の自分で」

そんな言葉が誠の口から出てくるとは予期していなくて、有人は息を呑んだ。

「やっぱ説教くせーな、悪い！」

過去の失態がどんなものだったかも知らないうちから、誠は僕を信じて寄り添おうとしてくれていたのか——^③ 有人は冷たい手の甲で頬を拭い、少し顔を横に向けた。初めて目にしたとき、意味がないと思つた信号機が見えた。誠の声がどんどん大きくなる。

「川嶋先生、やっぱすげーよ。その、善きサマリア人の法？ ヤバい状態の人を救うために最善を尽くしたら、結果が伴わなかったとしてもおとがめなしみたいな決まり、日本にはないのに、機内で名乗り出て助けたんだろ？」
有人は懸命に首を縦に振る。

「俺、そのときの川嶋先生、どんなだったかわかる。小西さんのとこに向かつてつたおまえだ。おまえ、川嶋先生に似てた」

まるで、全世界に自慢するように、怒鳴る

「おまえ、あのとき、すっげー、かつこ良かった！」^④

かつて一度は消えた灯が、その瞬間、もう一度生まれ
た。

※エピペン……アナフィラキシーがあらわれたときに使用

し、医師の治療を受けるまでの間、症状の
進行を一時的に緩和し、ショックを防ぐた
めの補助治療剤。

※バイタル……バイタルサインのこと。脈拍・呼吸・血圧

・体温を指す。

問二

1

3

び、記号で答えなさい。

ア、ようやく イ、すべて
ウ、もし エ、必ず

問三

＝ 線 A・B のここでの意味として適切なもの
をそれぞれ選び、記号で答えなさい。

A ア、本当に惜しまれる

イ、心底うらめしい

ウ、目の前から消える

エ、脳裏をかすめる

B ア、緊張をほぐす

イ、勇姿をほめそやす

ウ、苦勞をいたわる

エ、身体を心配する

問一 ——— 線①の後に補う言葉を考えて入れなさい。

問四

I

Ⅲ

に入る言葉を次からそれぞれ選

び、記号で答えなさい。

ア、幻のように イ、削がれたように

ウ、夜に白く エ、路面に黒く

問五

—— 線②とありますが、このときの有人の心の

動きについて説明した次の文章の（ 1 ）・（ 2 ）
にあてはまる語句を本文中から指定の字数で抜き出
しなさい。

道下麗奈のエピペン処置で失敗した経験を持つ有人
は、小西のために動くかどうかためらった。しかし、
（ 1（五字） ） 、誠の父、兄、誠の声を次々と思
い出すのを合図に（ 2（五字） ） に向けて、足を
踏み出した。

問六

—— 線③とありますが、この時の有人の状態に

ついて最も適切に説明しているものを一つ選び、
記号で答えなさい。

ア、過去の失敗に心どころか体までも冷え切った状態
になっているが、それを誠に気づかれまいとして
いる。

イ、誠の気持ちをありがたく思つて涙をこらえきれな
くなっているが、それを誠に気づかれまいとして
いる。

ウ、歯の根が合わないほどの寒さによつて頬も凍傷に
なりかけ、手も同様に冷えてはいるものの、触つ
て確認をしている。

エ、誠の気持ちがありがたくて涙が出たが、人を救う
ことができた今も、過去の失敗にはまだとらわれ
ている。

問七

—— 線④とありますが、どういうことだと考えられますか。「かつて一度は消えた灯」が何であるかを示し、四十字以内で答えなさい。